

加藤 きん | 国境を越えて命を救う |



加藤 きん
(登米市歴史博物館提供)

「私がこの職に就いたのは明治三十七（一九〇四）年で、今までに社会や人に対して、これと言って特別の働きもせず、功績も残しませんでした。ただ、赤十字伝統の博愛の精神にしたがってきただけです。看護婦として当然の務めを四十年間行ってきた私に、このような最高の栄誉が与えられたことは、先輩方のすばらしい働きの賜物で、この光栄は私事にすべきではなく、本当に心苦しく思っています。今、何千万の看護婦さんたちが、毎日困窮と戦いながら事業に身をささげておられますが、そのような人たちこそ、この栄誉を担われる人々です。」

昭和二十八（一九五三）年十月、フローレンス・ナイチンゲール記章を受賞した加藤さんは、受賞の喜びをこのように話しました。

大正三（一九一四）年、きんは救護看護婦養成所を卒業すると、日本赤十字社中央病院に勤務しました。このころ、ヨーロッパの国々では第一次世界大戦が始まり、非常にごんごんな戦いが行われていました。多くの死者や負傷者が出たことで、日本はフランスに看護班を派遣することになり、きんも招集されました。日露戦争などで救護活動をした経験豊かな看護婦や医者その他、優秀な看護婦が新たに選ばれました。きんは、選ばれたことをほこりに思い、他を愛し身をぎせいにしても弱者を助けるといふ日本赤十字社の精神を胸に、パリへ向かいました。

高い技術と経験をみとめられたきんたちが派遣されたフランスの日本赤十字病院は、戦争で傷ついた重症患者だけが運ばれてくる病院に指定されました。しかし、日本では、技術も経験も認められていた日赤看護班も、その実績はほとんど知られていませんでした。日本の病院に送られると聞くと、フランスの兵士たちはひどく失望したそうです。また、すぐに活動できるようにと船の中で覚えたフランス語も、地方なまりのある兵士たちには全く通じませんでした。そのため、目の前で血まみれになった患者が必死に痛みを訴えていても、どこがどのように痛いのが分からず、それに応じることができませんでした。「痛みも分かってくれない看護婦なんて話にならない。さわらないでくれ。」

次第に、『日本人は信用できない。』と言わんばかりに、治療をことわるフランス兵も出てきました。傷ついた人を助け、多くの命を救うためにフランスまでやって来たきんたちは、なすすべもなく立ちつくしました。「このままでいいのだろうか。自分たちがやるべきことは何なのだろう。」

きんたちは、血やほこりまみれになって戦場から運ばれてきた兵士たちに、一枚一枚手作りで日本の着物を縫い始めました。また、傷口の消毒やシーツ交かんも、毎日行いました。フランス人スタッフの力を借りて、患者に懸命に話しかけました。

「どこか痛むところはありますか。」
「もうすぐ、家族のもとへ帰れますからね。」

きんは、患者の手をにぎり、なれないフランス語で積極的に声をかけました。きんたちの心のこもった看護は、かこくな戦場で傷ついた兵士たちの心をとらえ始めました。日赤病院の技術も少しずつ認められました。中でも包帯のまき方はどんなに動いてもゆるまないということ、他の病院の医師たちも見学に来るほどでした。日赤病院は、次第に親切でしかも技術にすぐれている病院であると評判になり、傷ついた兵士たちの命のとりでとして、その役割を果たしていききました。

戦況は日に日に厳しくなりました。頭から背中にかけて砲弾のかけらがつきささった兵士、全身にやけどを負った兵士など、機関銃や毒ガスなどの新兵器の投入は、人間を人間と思えない姿に変えました。運びこまれる患者の数も、一か月に四千人以上となりました。

「人命が失われるのは、戦争災害の中で最も恐ろしいこと。最小限にとどめるために、わたしたちが力をつく

功績：世の中のためになすべく働いた博愛：すべての人を平等に愛すること。看護婦：今の看護師。困窮：苦しみやまずしさ。

フローレンス・ナイチンゲール記章：看護事業に一生懸命に働いた人におくられる、世界的な賞。

第一次世界大戦：大正三（一九一四）年から大正七（一九一八）年にかけて戦われた、人類史上最初の世界大戦。

派遣：役目を与え、ほかの場所に行かせること。

招集：多くの人をまねいて集めること。

日露戦争：明治三十七（一九〇四）年から明治三十八（一九〇五）年にかけて日本とロシアがおこなった戦争。

懸命：力いっぱい努力する様子。

かこく：厳しすぎること。ひごまき：ひごまき。

とりで：大切なものを守るためにつくった建物。

砲弾：大砲のため。

さなくては。」

きんたちは、日夜、寝る間もなく、看護を行いました。ある時、胸に砲弾の破片がささり、心臓にまで傷を受けた患者が運ばれて来ました。遠く離れた両親の到着まで、命がもつかどうか分からない危険な状況です。

「せめて一目、家族に……。」

看護婦たちは、家族が到着する九時間もの間交代で体を押さえつけ、止血を行い、その命をつなぎとめました。

「この患者は感染症のおそれがある。危険だ。急ぐぞ。」

手術は成功しても、細菌による感染症で命を落とす兵士も少なくありませんでした。化膿がひどく、助かるみこみのない兵士が運ばれると、どんなに忙しい中でも、消毒したシートで兵士の身をくるみ、日に3回はシートを交換し、傷口を常に消毒しました。日赤病院の懸命な看護は、失いかけた命をたくさん救いました。

戦況が悪化した大正四（一九一五）年の秋、救護班が危険になると判断した東京の日本赤十字本社は、「パリから撤退し、すぐに帰国せよ。」という命令を下しました。

「自分たちを必要としている患者がこんなにたくさんいるのに……。」救護班は本社に活動期間の延長を強く訴えました。フランス将兵たちの強い希望もあり、本社や国に願いが受け入れられ、その後も献身的な看護を続けました。

しかし、はげしい戦火は、パリ市街にまでおよぶようになりました。日赤病院からわずかのところにも攻撃を受け、きんたちの命も危ない状況でした。次々に運び込まれる重傷者。重傷者であふれ返る病室。大量に持ちこんだ薬品もすでに底をつきました。働き通しの看護婦たちの中には、たおれる者も出てきました。日赤病院は活動の限界に追いこまれ、とうとう、パリの病院を離れ、日本に帰ることになりました。

大正五（一九一六）年七月、最後まで守れなかった傷病兵たち、共に働いてきた病院のスタッフを残し、救護班は帰国のためパリの駅に着きました。すると、その時、倒れそうになりながらもゆっくりと救護班に向かって来る男たちが見えました。きんたちが救護をした兵士たちが見送りに来てくれたのです。

「ありがとうございます。……。」

そう繰り返す患者たちに、ただただ、手をにぎり返すことしかできませんでした。

きんは、帰国後もシベリアに渡り、傷ついた兵士を救護しました。昭和十二（一九三七）年の日中戦争の時

には、看護婦長として赤十字病院船に乗り日本と中国の間を十回も往復して、多くの尊い命を救いました。日本赤十字社を退職してからは、ふるさとの宮城県佐沼高等学校の養護教員として働き、親のように生徒を大切に思い、高校生の心身の健康を支えました。そして、昭和二十八（一九五三）年には、フローレンス・ナイチンゲール記章を受賞したのです。

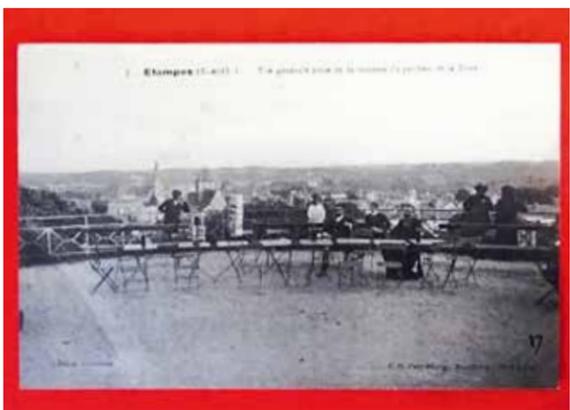
加藤 きん

加藤 きんは、明治二十三（一八九〇）年、現在の登米市迫町に生まれた。第一次世界大戦やシベリア出兵の際、従軍看護婦として戦地に赴き、傷ついた兵士の救護にあたった。日中戦争の際は、病院船に乗り、日本と中国の間を十往復し、多くの尊い命を救った。この功績が認められ、フローレンス・ナイチンゲール記章を受賞した。



エタンプにて 1915年10月23日
親愛なるマドモアゼル
エタンプでのあなたとのよき思い出をしのびつつ、あなたとの再会を願っております。そしてわたしの最大の感謝の気持ちをどうか受け取ってください。

リュ・ブリアン



フランスの兵士からのはがき
(登米市歴史博物館所蔵)

化膿…
膿をもつこと。

撤退…
軍隊などが陣地から離れること。

献身的…
自分を犠牲にして人のために尽くす様子。

マドモアゼル…
フランス語で独身の女性を表わす言葉。
「お嬢さん」

日中戦争…
昭和十二（一九三七年）から昭和二十（一九四五）年まで、おもに中国大陸で戦われた日本と中国との全面戦争。

従軍…
軍隊につき従って戦地に行くこと。

ナイチンゲール…
イギリスの看護師、社会実業家、統計学者、看護教育者。近代看護教育の母。病院建築でも才能を発揮した。